

科 研  研 究

IV

科学研究成果発表展

研究課題：古典絵画における岩絵の具粒子分布の検討とその芸術表現への応用

[日時] 2015年11月25日(水)～12月11日(金)
10:00～18:00 土曜・日曜 閉廊

[場所] 女子美術大学相模原キャンパス Joshibi SPACE 1900
女子美術大学相模原校舎1号館1階

[出品者] 〈研究分担者〉 女子美術大学日本画研究室 准教授 宮島弘道

〈研究協力者〉 女子美術大学大学院博士課程 藤原宇希子

女子美術大学大学院修士課程2年 尾身晴香

慶野智子

川畑里枝

女子美術大学大学院修士課程1年

芦垣詩織

飯島香

近藤ひかり

中村風香

溝口まりあ

横山芙実



■ 展示について

古来より洋の東西を問わず、鉱物の顔料で多くの絵画が描かれてきました。西洋におけるフレスコ、テンペラ、油彩画などの絵画技法は「つなぎ」の違いはあるものの多くの天然資源を利用してきたことに変わりありません。

東洋絵画においても同様ですが、特に近代日本においては『日本画』の登場により膠（にかわ）を接着剤にして岩絵具を色材とする絵画技法を“へその緒”にして多様な『日本画』が生まれてきました。

現在においては、貴石・半貴石の世界的需要の増大と資源の枯渇問題に直面しており、天然鉱物から作られる岩絵具の希少性は高まり、その多くは人工的岩絵具に頼っている現状です。

そうした状況を踏まえ、女子美術大学日本画研究室では、新たな発想による岩絵具の開発に力を注いできました。

今回の作品表現研究の実験作品には、室町時代前半に制作されたと想定される曼荼羅で使用されている絵具の粒子分布の調査結果に基づき、新たに造粒された岩絵具を使用しています。（本展示においては“今回の岩絵具”と統一表記）

この絵具の特徴として以下の3点が挙げられます。

- アルミナ（酸化アルミニウム）の粉体（担体／ボディ）に色材の着色（コーティング）することで作られている。
- 3段階の粒子分布を持つアルミナを使用しており、粗目・中目・細目と表記。
- アルミナの粒子の粗さに関係なく、自由に着色が可能である。

今回の岩絵具を用いた実験作品の制作及び考察には、当大学大学院生を中心に11名が参加し、日頃の制作との違いを感じ苦心しながらの制作となりました。

粒子のサイズが制限されることで見えてくる、普段気づくことのなかった岩絵具と作者との関係への気づきが散りばめられた展示になりました。

鉱物の粒度という独創的視点を端緒にしたこの実験作品群から、岩絵具の新たな息吹を感じて頂けますことを願っております。

最後に、今回の展示にあたり尽力いただきました皆様に厚く御礼申し上げます。

平成28年2月



宮島弘道 [研究分担者]
女子美術大学准教授 専門：日本画
創画会会員

芦垣詩織

Ashigaki Shiori



藤の渡せ川

タテ 116.5cm × ヨコ 80.5cm

今回の岩絵具を使用しての考察

今回の岩絵具の粗さの幅は、細目、中目、粗目に分けられた。制作では主に中目と粗目を使用した。中でも特に多く使ったのは中目だ。中目で作品全体に色を乗せ、粗目で岩の表情を出した。大学2年の時から主に今回の岩絵具で制作を行っていたので特にマチエールでの不便はあまり感じられなかった。兎の白は柔らかい毛の表情を出したかったので今回の岩絵具は使用しなかった。なぜなら今回の岩絵具の細目の白でいつもの表情が出せるかわからなかったので胡粉を使用したのだ。粗さの幅は限定されていたが自由に制作できた。

普段の作品



帰郷の宴

タテ 227.3cm × ヨコ 162cm

2015年

飯島 香
Iijima Kaori



今ここにいる
タテ 116.5cm × ヨコ 91cm

今回の岩絵具を使用しての考察

私の作品は、細い色の線を並べることにより構成されている。その色の線を絵具でぷっくりと盛り上げるように塗る表現をするには中目の絵具の描き心地がこの表現に適しているように感じたので中目を中心に用いて制作を行った。

普段の制作では、描き込んだ画面の上から水晶末の5、6番等の粒子の粗い絵具を塗って透明感のあるザラザラとしたマチエールをつくる。今回の絵具の中でいちばん粗目の白い絵具を使用して同じような表現をしようと試みたが、普段使っている絵具よりも細かいため、同様の質感を得ることはできなかった。粒子の粗さが制限され、統一された種類の絵具を使用したことにより、マチエールに変化をつけることが難しく、全体的に滑らかな質感の画面に仕上がった。

制作を通して、今回使用した絵具の3段階の粗さは、普段使用している絵具の粗さの中では細かい部類であることが分かった。粒子の粗さの制限は、表現の幅の制限でもあるように感じた。

普段の作品



be dyed-c
タテ 97cm × ヨコ 145.5cm
2015年

尾身晴香
Omi Haruka



ナーガラージャ（アマリタ伝説より）
タテ 80.5cm × ヨコ 116.5cm

今回の岩絵具を使用しての考察

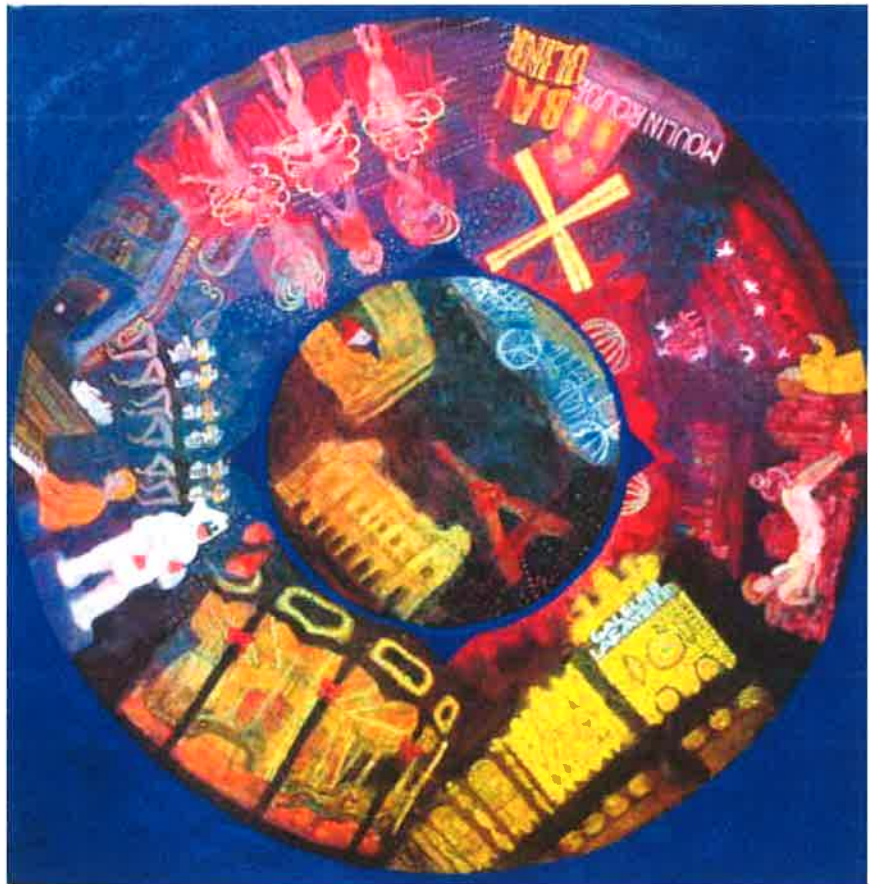
私が作品を制作するにあたり重要視していることは、リアリティである。それは、細密描写による重量感というよりも作品の中の空気感や実在感を特に大切にしているということである。そのため、私の作品は、ほとんど細目と中目しか使われていない。作品を仕上げる時に粗目を使ってしまうと細かな調整が出来ないためである。しかし 100 号以上の作品になるとこの限りではない。それは画面が広ければ広いほどその表現方法によるバリエーションが必要になるからである。今回の作品は比較的小さいため、細目と中目のみを使用しているが、波の表現と雲の表現に差異が見られると思う。これは、粒子の粗さの違いではなく描画に使用する道具の違いである。使用する道具の効果が存分に発揮できる粗さは細目と限られるが、何度も同じ作業を繰り返すことで見た目には粒子の違いと見せることも可能である。

普段の作品



昇
タテタテ 227.3cm × ヨコ 162cm
2014 年

川畑里枝
Kawabata Rie



パリの夜は永遠に美しき
タテ 116.5cm × ヨコ 116.5cm

今回の岩絵具を使用しての考察

街全体を覆う夜の雰囲気表現するために、今回の岩絵具の粗目を何度も流し塗りをして、マチエールを作ってから、細目と中目で具体的にモチーフを描写していった。ただし、細目と中目を使ううちにマチエールが消えて、描写部分の画面がフラットになった。

これまでの制作においては、モチーフを描写した後で、粗い岩絵具を全体にかけて統一感を出していたが、今回の岩絵具は、粗目でも下の絵具を隠蔽してしまうので、粗い絵具をかける作業ができず、パラパラとした印象になってしまった。

粗目、中目、細目の3種類あったが、実際には粗さの幅はあまり感じず、もっとザラザラした粗い絵具や、泥のようにねっとりした絵具が欲しいと感じた。今まで意識したことはなかったのだが、日本画を制作しながら砂遊びに近い感覚で、粒子による塗り心地や質感の違いを味わうことに楽しさを感じていたことに気付いたのは、今後の制作における大きな収穫であった。

普段の作品



光の島
タテ 970cm × 194cm
2014年

慶野智子
Keino Tomoko



サンゴ
タテ 91.0cm × ヨコ 116.5cm

今回の岩絵具を使用しての考察

岩を砕いて作る天然の岩絵具は現在 10 段階程度の粒子があり、細目になるほど色は薄く、粗目になるほど濃くなる。

今回の制作で使用した粒子は、粗目・中目・細目の 3 段階である。

マチエールに関しては、より粗目のものを使用して描きたいと感じたが、作品のサイズを考えると自分の表現にあった粒子の幅であったとも思う。曼荼羅のように細かな描き込みをするのであればより粒子の細かいもの、大きな作品であれば粗いものを使い画面をもたせるといった使い方が理にかなっていると感じた。この制作では粗目の絵具を多く使い、細目の絵具はそれらをなじませるように使用した。

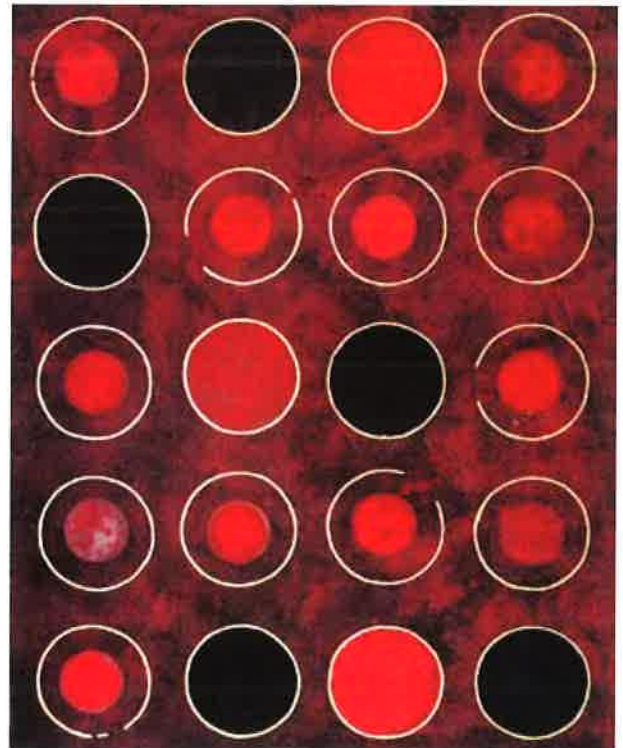
普段の作品



ゆらぎ
タテ 162cm × ヨコ 227.3cm
2014 年

近藤ひかり

Kondo Hikari



満たすもの
タテ 65cm × ヨコ 35cm 2枚

今回の岩絵具を使用しての考察

今回は指定された3段階の粗さの岩絵具を様々なパターンで組み合わせ、その重ね方によってマチエールの違いをみたサンプルとしての作品である。

普段は粗い絵具を利用したマチエールを特徴とする大きな作品制作が基本であるため、今回はベースを厚く塗り重ねて画面に傷を付け、普段の制作のように粗い絵具を使ったベースに近づけた。その上で使用する絵具をそれぞれ赤と青の一世に限定し、粒子の粗さだけ3段階に分けて制作した。赤と青で描かれた全ての円の中で絵具の重ね方を変え、粗目のみ・粗目と中目・粗目と中目と細目・中目と細目等、1色につき15通りのパターンを制作した。

その結果、色については重ね方によって各々特徴がみられたが、マチエールにはっきりとした違いはわからなかった。自分の大きな作品制作において、今回指定された3段階の岩絵具では、色の変化に影響を与えることはできるが、マチエールでみせるには難しいことがわかった。

普段の作品



ぬけだす
タテ 227.3cm × ヨコ 181.8cm
2015年

中村風香
Nakamura Fuka

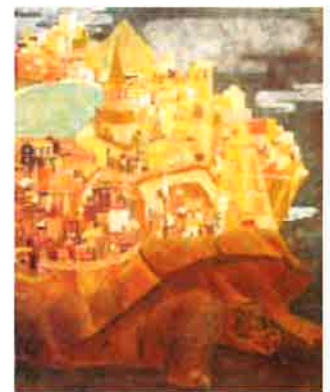


漂着
タテ 91cm × ヨコ 116.5cm

今回の岩絵具を使用しての考察

普段の制作では今回使用した岩絵具は使用しないことが多く、粒子の粗い絵具や砂などの他素材を用いるなどして絵肌を作った上で描画していくことが主である。限定された絵具のみを使用した今回の制作は私にとってかなり制限されたものであるように感じられた。使用できる中で最も粗い絵具も普段使用しているものと比べるとそれほど粗さがあるものではなく、マチエールを殆ど利用できない中での表現には苦戦させられた。最も難しく感じたのは質感の表現である。普段の制作でいかに絵具の粒子やマチエールに助けられているのかということを改めて感じるようになった。

普段の作品



この世界で
タテ 227.3cm × ヨコ 181.8cm
2015年

藤原宇希子
Fujiwara Ukiko



メガチカチカ
タテ 91.0cm × ヨコ 116.5cm

今回の岩絵具を使用しての考察

岩絵具の粒子段階を普段より強く意識して使用するにあたり、それぞれを効果的に表現に利用する為、基本的に以下の用途で制作を進めた。

粗目の絵具は、部分的な盛り上げ、画面の厚みを出す為。

中目の絵具は、粗い絵具の上に重ね、凹凸を均一にする為。

細目の絵具は、画面を高い密度で覆いベタ塗りをする、また光沢を出す為。例えば、モチーフであるカメレオンの皮膚の質感を出す為に、まず粗目で盛り上げ中目で均し、最後に細目で覆うことで、つるんと膨らむ鱗の表現を目指した。

また実験として、色面構成の様なベタ塗りの背景の中でも、基本に則り粗目から中目、細目へ粒子順に塗り重ねた部分とは別に、粗目の絵具のみが露出する部分を作る事で絵肌のざらざら感に差を付け、雰囲気が変わるのかを試した。

粒子を3段階に限定された事による不便は特に感じなかった。それは粒子の大きさに関係なく自ら絵具の色を調整できた点が大きな理由だと感じている。

普段の作品



Biotope
タテ 181.8cm × ヨコ 227.3cm
2015年

溝口まりあ
Mizoguchi Maria



奇石

タテ 116.5cm × ヨコ 91.0cm

今回の岩絵具を使用しての考察

「奇石」の岩肌を表現するために粗目の黒色と紺色をマチエールとして使用し、中目と細目は描写する際に使用、特に細目の白色はハイライトの表現で使用した。粗目の黒色に中目の白色を混合させることでモノトーンの淡いグラデーションを中間色として使用した。

今回の研究制作において、岩絵具の粗さの制約や色幅の限定的な表現方法でも絵具の粒子の違いを考えた組み合わせや、混色方法、絵具を塗り重ねることによって生まれるマチエールの表現について模索することができた。

普段の作品



グランドキャニオンの夕日
タテ 181.8cm × ヨコ 227.3cm
2015年



宮島弘道

Miyajima Hiromichi



鉢底図

タテ 170cm × ヨコ 60cm

今回の岩絵具を使用しての考察

細目はベースとなるコナパテを青く着色する目的で大量(300g程度)を使用した。比重が軽い細目を使用したことで全体に分散させることができた。

中目は今回あえて使用していない。理由は普段使用する岩絵具の粒度がかなり粗い為、より粗いものを選択したためである。

粗目を中心に利用したが、藍で描いた葛の蔓に強弱をつけるため、藍色に着色した今回の岩絵具を使用した。しかしマチュエルの変化による表現の違いは得られていない。

曼荼羅に使用された天然岩絵具が、『求める色』と『塗りやすさ』の妥協点からモチーフを小画面に的確に表現することを目的として造粒されているのに対し、私の作品は大画面でテクスチャ重視の表現であるため、粗さと細さの差が極端な岩絵具を求めていることを確認できた。

普段の作品



鉢底図

タテ 260cm × ヨコ 160cm
2015年

科 研  研 究